

# 李大钊全集

第二卷

河北教育出版社

## 目 录

中国国际法论（一九一五年四月）	(1)
叙文	(1)
原叙	(2)
译叙	(3)
译例	(4)
凡例	(5)
外国裁判权与外国行政地域	(7)
绪论（目一）	(7)
第一编 沿革论	(10)
第一章 无权时代（目二）	(10)
第二章 得权时代（目三）	(28)
第三章 竞权时代（目四）	(51)
第二编 外国裁判权之性质及范围	(63)
第一章 关于外国裁判权之基础观念（目五）	(63)
第二章 服外国裁判权之案件（目六）	(77)
第三章 外国裁判权与中国领土（目七）	(97)
第三编 外国行政地域论	(106)
第一章 外国行政地域总论（目八）	(106)
第二章 专管居留地	(110)

---

第一节	专管居留地法理上之性质 (目九)	.....	(110)
第二节	专管居留地之行政关系 (目一〇)	.....	(120)
第三节	专管居留地之土地法关系(目一一)	.....	(130)
第四节	居住专管居留地外人之地位(目一二)	...	(134)
第五节	专管居留地之战时关系 (目一三)	.....	(141)
第三章	共同居留地 (目一四)	.....	(145)
第四章	铁路附属地 (目一五)	.....	(153)
第五章	公使馆区域 (目一六)	.....	(165)
第四编	外国裁判制度之内容	.....	(169)
第一章	外国裁判法规 (目一七)	.....	(169)
第二章	裁判机关	.....	(181)
第一节	裁判所 (目一八)	.....	(181)
第二节	关于裁判之职员 (目一九)	.....	(195)
第三章	民事裁判制度	.....	(202)
第一节	民事实体法关系 (目二〇)	.....	(202)
第二节	民事程序法关系 (目二一)	.....	(214)
第四章	刑事裁判制度	.....	(226)
第一节	刑事实体法关系 (目二二)	.....	(226)
第二节	刑事程序法关系 (目二三)	.....	(231)
第五章	在华裁判所与内国裁判所 (目二四)	.....	(241)
第五编	裁判上之国际交涉	.....	(249)
第一章	国际诉讼共助 (目二五)	.....	(249)
第二章	会审制度 (目二六)	.....	(257)
第三章	观审问题 (目二七)	.....	(269)
结论	(目二八)	.....	(282)

---

附录：论撤去领事裁判权	(288)
启事三则（一九一五年四月）	(294)
国民之薪胆（一九一五年六月）	(297)
欧洲战事谈（一九一五年八月一日）	(309)
厌世心与自觉心（致《甲寅》杂志记者）	
（一九一五年八月十日）	(313)
我的自传（一九一五年）	(322)
警告全国父老书（一九一五年）	(323)
民彝与政治（一九一六年五月十五日）	(334)
黄种歌（一九一三年十二月——一九一六年五月）	(360)
致霍列白（一九一六年五月）	(361)
寄霍列白（一九一六年五月）	(362)
致霍列白函（一九一六年五月）	(363)
《晨钟》之使命——青春中华之创造	
（一九一六年八月十五日）	(364)
新生命诞生之努力（一九一六年八月十五日）	(370)
“第三”（一九一六年八月十七日）	(371)
介绍哲人托尔斯泰（Lev Tolstoy）	
（一九一六年八月二十日）	(373)
介绍哲人尼杰（Friedrich Wilhelm Nietzsche）	
（一九一六年八月二十二日）	(375)
权（一九一六年八月二十九日）	(377)
政谭演说会之必要（一九一六年八月三十日）	(378)
达科儿之“爱”观（一九一六年八月三十日）	(379)
倍根之偶像说（一九一六年八月三十一日）	(380)

青春 (一九一六年九月一日) .....	(381)
奋斗之青年 (一九一六年九月三日) .....	(394)
新现象 (一九一六年九月四日) .....	(399)
别泪 (一九一六年九月四日) .....	(401)
祝九月五日 (一九一六年九月五日) .....	(403)
李守常启事 (一九一六年九月五日) .....	(405)
国庆纪念 (一九一六年十月一日) .....	(406)
制定宪法之注意 (一九一六年十月二十日) .....	(408)
省制与宪法 (一九一六年十一月十日) .....	(414)
宪法与思想自由 (一九一六年十二月十日) .....	(432)
矛盾生活与二重负担 (一九一七年一月十日) .....	(440)
《甲寅》之新生命 (一九一七年一月二十八日) .....	(445)
调和之美 (一九一七年一月二十九日) .....	(447)
孔子与宪法 (一九一七年一月三十日) .....	(448)
真理 (一九一七年二月一日) .....	(451)
真理 (二) (一九一七年二月二日) .....	(452)
自然的伦理观与孔子 (一九一七年二月四日) .....	(453)
预定制宪期间案 (一九一七年二月四日) .....	(456)
论收毁制钱宜有准备 (一九一七年二月六日) .....	(457)
中国与中立国 (一九一七年二月七日) .....	(460)
回春之北京 (一九一七年二月七日) .....	(461)
元宵痛史 (一九一七年二月八日) .....	(462)
日本之托尔斯泰热 (一九一七年二月八日) .....	(463)
美德邦交既绝我国不可不有所表示 (一九一七年二月九日) .....	(466)

---

我国外交之曙光 (一九一七年二月九日) .....	(468)
黄金累累之日本 (一九一七年二月十日) .....	(470)
可怜之人力车夫 (一九一七年二月十日) .....	(473)
今后国民之责任 (一九一七年二月十一日) .....	(475)
威尔逊与和平 (一九一七年二月十一日) .....	(477)
中德绝交后宜注意西北 (一九一七年二月十二日) .....	(478)
战争与铜 (一九一七年二月十四日) .....	(479)
德皇之欺世论 (一九一七年二月十四日) .....	(482)
爱国艺术家罗丹翁病笃 (一九一七年二月十四日) .....	(483)
学会与政党 (一九一七年二月十五日) .....	(485)
诗人达阿儿之行踪 (一九一七年二月十六日) .....	(486)
论国人不可以外交问题为攘权之武器	
(一九一七年二月十七日) .....	(488)
外交研究会 (一九一七年二月十七日) .....	(491)
北美之风云儿——罗斯福请愿出征	
(一九一七年二月十八日) .....	(492)
新中华民族主义 (一九一七年二月十九日) .....	(493)
一致与民望 (一九一七年二月二十一日) .....	(496)
极东们罗主义 (一九一七年二月二十一日) .....	(499)
哭沈汉卿君 (一九一七年二月二十一日——二十四日) ...	(501)
议会之言论 (一九一七年二月二十二日) .....	(506)
政论家与政治家 (一) (一九一七年二月二十五日) .....	(510)
蔷薇缘欤? 蔷薇恨欤? (筑声剑影楼纪丛)	
(一九一七年二月二十八日) .....	(513)
政论家与政治家 (二) (一九一七年三月二日) .....	(515)

## 中德邦交绝裂后之种种问题

- (一九一七年三月五日) ..... (518)  
 爱国之反对党 (一九一七年三月七日) ..... (521)  
 立宪国民之修养 (一九一七年三月十一日) ..... (525)  
 创设特别国务会议增造不管部之国务员问题(三)  
     (一九一七年三月十四日) ..... (528)  
 创设特别国务会议增造不管部之国务员问题(九)  
     (一九一七年三月十七日) ..... (532)

## 俄国革命之远因近因

- (一九一七年三月十九日——二十一日) ..... (537)  
 共和国与荣典 (一九一七年三月二十二日) ..... (549)  
 法国内阁改组之由来 (一九一七年三月二十四日) ..... (550)  
 面包与和平运动 (一九一七年三月二十五日) ..... (553)

## 俄国共和政府之成立及其政纲

- (一九一七年三月二十七日) ..... (555)  
 俄国大革命之影响 (一九一七年三月二十九日) ..... (559)  
 战争与人口问题 (一九一七年三月三十日) ..... (561)  
 青年与老人 (一九一七年四月一日) ..... (565)  
 战争与人口 (上) (一九一七年四月一日) ..... (569)  
 美与高 (一九一七年四月一日) ..... (609)  
 大战中欧洲各国之政变 (一九一七年四月一日) ..... (613)  
 筷舫、寿山将往阿尔泰，诗以赠之  
     (一九一七年四月一日) ..... (631)  
 前意未尽更赋一律 (一九一七年四月一日) ..... (632)  
 神州风雨楼 (一九一七年四月一日) ..... (633)

---

送相无（一九一七年四月一日）	.....	(634)
乙卯残腊，由横滨搭法轮赴春申，在太平洋舟中作 （一九一七年四月一日）	.....	(635)
学生问题（一九一七年四月三日）	.....	(637)
学生问题（二）（一九一七年四月五日）	.....	(641)
都会少年与新春旅行（一九一七年四月七日）	.....	(645)
讲演会之必要（一九一七年四月八日）	.....	(648)
动的生活与静的生活（一九一七年四月十二日）	.....	(651)
大战中之民主主义（Democracy） （一九一七年四月十六日）	.....	(654)
真理之权威（一九一七年四月十七日）	.....	(658)
大亚细亚主义（一九一七年四月十八日）	.....	(662)
不自由之悲剧（一九一七年四月十九日）	.....	(665)
受贿案与立宪政治（一九一七年四月二十日）	.....	(671)
罪恶与忏悔（一九一七年四月二十一日）	.....	(673)
简易生活之必要（一九一七年四月二十二日）	.....	(675)
中心势力创造论（一九一七年四月二十三日）	.....	(677)
欧洲各国社会党之平和运动 （一九一七年四月二十四日——五月五日）	.....	(680)
川局罪言（一九一七年四月二十六日）	.....	(696)
政治之离心力与向心力（一九一七年四月二十九日）	...	(697)
旅行日记（一九一七年五月九日——十一日）	.....	(700)
自由与胜利（一九一七年五月二十一日）	.....	(703)
乐亭通信（五月二十三日守常自乐亭寄） （一九一七年五月二十八日——二十九日）	.....	(706)

## 天津法政专门学校校长及教务长易人

- (一九一七年六月二十五日) ..... (709)  
致李泰棻 (一九一七年七月) ..... (711)  
辟伪调和 (一九一七年八月十五日) ..... (713)  
致白坚武 (摘要) (一九一七年九月十一日) ..... (729)  
此日 (致《太平洋》杂志记者)  
(一九一七年十月十五日) ..... (730)  
暴力与政治 (一九一七年十月十五日) ..... (734)

# 中国国际法论<sup>\*</sup>

(一九一五年四月)

## 叙 文

张君润之、李君大钊留学日本东京，以书氏予。盛称日人今井嘉幸氏所撰《中国国际法论》一书，谓将以课余从事逐译，为谋国者之考镜，并属予有以扬榷之。伟哉两君，可不谓吾国之有心人乎？海通以来，吾国所缔结种种不平等之国际契约，束缚驰骤，迄于今兹，而未有艾，且加厉焉。国之不竞，法于何有？然而吾侪盱衡国际，顾不得不汲汲于此者，非谓法之力足以取国之力移易而代用之。而原始要终，不能不以法胜，是则法之力固未尝一日不旁薄生动于国际间也。

\* 《中国国际法论》，今井嘉幸著，李大钊、张润之合译，一九一五年七月在日本由健行社出版发行。兹所录为本书第一卷《外国裁判权与外国行政地域》，未见其后各卷。今井嘉幸（一八七八——一九五一），日本爱媛县人，东京帝国大学毕业，法学博士。一九〇八年二月，经吉野作造推荐，到天津北洋法政专门学堂任教。一九一三年“二次革命”失败后回到日本，主要从事律师职业，并研究中国问题。张润之（一八八九——？）直隶武强（今河北武强县）人，李大钊在北洋法政专门学堂及留学日本时的同学。回国后，还曾共事数年。此书由黄霞、金靖点校、整理。

不平等之契约，在理非法之所自出，然而法存犹得以契约闻，否则并契约而亦亡之矣。奚翅法？予惟今后吾国之对于国际法也，第一当笃信法之力以为国际契约成立之根据；第二当注意于国际契约变动或毁弃之时是否尚容法之存在；第三当令法之力与国之力均立于国际平等之地位；第四当运用法之力令国际契约变动或毁弃之时，主之自我。夫如是，然后于国际上乃有法之可言。今井氏于吾国经历既富，情感亦深，其所言必有足采者。以张君等所寄之第一卷证之可见。特不审吾侪为是书中之主人者，其所怀当何似也。民国四年四月汤化龙叙。

## 原　　叙

研究中国问题，余之毕生之业也。余曩承先师梅博士荐，受聘于中国政府，赴天津任。公暇辄考核彼国特有之对外关系，冀成《中国国际法论》之著。自是几历星霜，涉猎东西典籍，广征材料；亦复奔驰南北，躬自踏寻外权侵入之实势。顾有所探究，辄滋疑窦，每艰于论断。则自私心以为较确者，渐积厥稿，将以问世，就正识者。而业方半，适彼邦革命变起，慨然投笔，束装南下。濒行，持所汇集研究之绩，授亲友曰：“余若不得生还，请以是为纪念，愿以贻诸当世笃学之士。”乱既平，草建国策，属法校诸生译之，颁寄彼邦朝野名流。乃复杜门绝世，不与风云之去来相接，专意以成前日未竟之业，是书即所得之一端也。书成，追维往事，感慨系之

矣。但日居月诸，穷研兹事，虽云辛苦备尝，而审所作，仍拙劣不足观。才不副志，深以为憾耳。然本书内容中，如关于外国行政地域之部分，以余寡闻，未曾一聆学者于此表示其意见。外国裁判权虽一般视为领事裁判权或治外法权，试其议论，而关于中国者，则语焉不详。至其与此邦特色、外国行政地域间之重要关系，殆又皆漠然置之。此余所由于编纂本书之际，先致意于精查其事实，而后以是为基础独抒己见也。妄断之讥，固知难免；或幸而见许，谓于前人未拓之域，效尺寸之功，著者荣幸，何以加兹？

## 译　　叙

日本法学博士今井嘉幸氏，在吾国天津北洋法政专门学校执教鞭者六载，译者因得亲<炙>〔炙〕其教。尝语吾侪曰：“中国将来，必当撤去领事裁判权，诸君研究法学，宜预为之备。吾积稿累案，暇当贡之诸君。”惜以校课繁颐未果也。迨同人创北洋法政学会，刊布《言治》杂志，征稿于博士，则欣然为撰一文，题曰：《论领事裁判权之撤去》。兹附于卷末。民国初建，更纂《民国建国策》，以非卖品之小册，遍送吾国政治舆论之中枢人物。彼既于此研求有素，乃亟思返国，从事著作，置身于学者之林。前岁解约东归。译者亦于是年卒业，旋即游学此邦。去年春，访之于东京旅舍，时值所撰博士论文付印，须躬自校讎，日无寸晷。相见匆匆，辄以原稿见示。询及中国近来法制之变迁，对于复古之潮流，滋抱悲观，谓其影响于法律前途者，将与撤去“领事裁判权”以莫

大之障碍，谈次为之慨然。未几果及第，得博士学位，遂纂辑其说，成《中国国际法论》。第一卷，专论各国在中国之外国裁判权及外国行政地域，并有二卷、三卷将赓续问世。是书详于外力侵入中国之迹，且足为吾国将来撤去、外国裁判权、收回外国行政地域之考镜。爰从同学张君，并力逐译，即付剞劂，蕲贡关心国际关系者之一助。嗟呼！国之不竞，法于何有？经此世局巨变之后，列国在吾华势力之进展，吾华在世界国际法上之地位，变转迁流，正未知其夷于胡，似不图亚人相煎之际，此邦人士犹有念同根之痛，如博士其人者。而反顾夏宇邦之人，醉梦于燕幕鱼釜之中，既所在多是；其有聪明颖悟之士亦且瘁心殚虑于内忧外患之间，皇皇焉奔呼救亡之不暇，更有何人专志学术，致令究考吾国痛深切肤之国际关系者，转让异邦人士着其先鞭。是则余于是书译本杀青之日，不禁兴无涯之感慨者矣！

民国四年四月 李大钊识于日本东京

## 译 例

- (一) 著者持论，夙极平正，惟以权利国人。编纂是书，其为义务国之吾国谋者，究未能畅其所怀。至于抉别会通，是望慧心之读者。
- (二) 著者引用哲语，每摘取原文，译者仓率就稿，未能译成汉文，阅者谅之。

- (三)书中日文名辞，竭力改译通用汉文，但于名实稍有所失，如吾之称居留地为“租界”者，则仍取日文原语。
- (四)译者译才，既愧未逮。以亟于付梓，详审校讎又非时间所许。讹谬之处，自知不免。大雅君子，幸匡正之。
- (五)译者遂译是书，颇蒙著者不弃，允为指正，并宠赐肖影。除将肖影镌之卷首，附志数语，以表谢忱。

## 凡例

- (一)本书论究之范围，以中国本部及满洲为主。其关于蒙藏之材料，难于采集，且除蒙古一部外，未尝亲自踏查，补辑纂述，期以异日。
- (二)约文若一致援引华文，首尾始觉一贯。然以华文为法律用语，总多暧昧之处。故于斯编，务摘取其相对国之成文。
- (三)西文之沿用既久者，虽可以汉字或平假名表之，而沿用未久者，每因发音不正，有生误解之虞，故以原罗马字表之。
- (四)文中有须注释者，则于其括要处贅以小数字，而于节末举其注释，复冠以数字为符，以便寻绎。
- (五)文中所用之参考书及其他引证之材料，务揭举于注释中。但初见时，皆详举其名，如以后屡见者，则为避烦，或称前揭，或取略式。
- (六)下列略字，编中屡用之：
1. *Foreign Jurisdiction Act or F. J. A. =The Foreign Juris-*

- diction Act, 1880. (53 & 54 Vict, 37)*
2. *China Order or C. O. =Order of His Majesty the King in Council for the Government of His Majesty's Subjects in China and Korea, 1904.*
  3. *Konsulargerichtsbarkeits-Gesetz od. K. G. G. =Gesetz über die Konsulargerichtsbarkeit, 1900.*
  4. *Konsulargesetz. =Gesetz betreffend die Organisation der Bundeskonsulate sowie die Amtsrechte und Pflichten der Bundeskonsulen, 1870.*
  5. *Edit, 1778=Edit Parlant règlement sur les fonctions judiciaires et de police qu'exercent les consuls de France en Pays étrangers, 1778.*
  6. *Loi, 1836=Loi relative à la poursuite et au jugement des contraventions, délits et crimes commis par les français dans les échelles du Levant et de Barbarie, 1836.*
- (七) “领事制”即明治三十二年法律第七十号关于领事官职务之制度。
- (八) 一八五八《天津英约》即西历一千八百五十八年《天津中英条约》。《天津日本协定》即《天津日本专管居留地协定书》。其他准此。

# 外国裁判权与外国行政地域

## 绪 论（目一）

中国所以为今日世界外交上注目之中心者，为其领土内有诸外国之所。谓利权，具各种形体而存在也。由法律上综观之，得以构成《中国国际法论》，明其特种国际地位焉。而此等利权中最富于复杂法律关系之内容，须精确之讨究者，首推“领事裁判权”与“居留地制度”二者。

“领事裁判权”虽为从来惯用之语，而按中国之现情，则斯语为名不副实。何者？有二三国已于中国不以“领事裁判”自足，而于主要场所，设正式裁判所，且于某类案件，无论何国，得移送之于其裁判附近之殖民地，或其本国，不一任诸驻华之己国领事。故余以为，与其如领事裁判权云者之依为其裁判之机关锡以斯名，毋宁欲着眼于其权利自体而称之为“外国裁判权”也。斯名既觉甚便，同时且能表两面之意义，即准义务国以思之，有行于己国内之他国裁判权之义。准权利国以思之，有己国裁判权之行于他国者之义也。

所谓“领事裁判权”者，虽为属人之观念，今于中国对外人居留地所行之外国行政权，则有属地之关系。于此行政权之范围，此等居留地，颇仿佛外国领土。而至近时，居留

地以外，尚有与此相同之关系者，譬之附属外人经营某种铁路之地带，其一例也。余欲括纳此等地域，称为“外国行政地域”。盖现时绝无比类中国之特色也，但此中不含学者之所谓租借地。所谓租借之为领土割让之意与否，姑置勿议。其于事实，对于租借之租借国政治设施，与对于己国领土，毫末无异，非可与上述仅就行政关系存属地观念者同日而语焉。

外国裁判权与外国行政地域，颇有密接之关系。所谓领事裁判与居留地，其在中国，不惟其起源略同，居留地之行政权，实赖领事裁判权之后援而发达，特以其刑事裁判权为尤然。而外国裁判权，则又依于今日居留地及其他外国行政地域有其行政权之助力，得行使之至于毫无遗憾。因之于中国领事裁判制度，生特种见象者不少，此当注意者也。而以外人之有居于外国行政地域外者，华人亦有居于其内者，从而外国裁判权，有时行于其行政地域以外，而华人虽居其内，亦有不服外国裁判权者。然为其行政保护之便，外人自集其内，故外国裁判权，殆亦有以外国行政地域为其舞台之观也。今若二者撤去其一，其他必至蒙非常之影响。特以如居留地制度者，其在中国，与外国裁判权将来同其运命，可以预知矣。

所谓领事裁判制度者，由司法关系观之，殆以俾己国民沐与在本国相同之恩泽，延至于其国贸易之盛衰亦有关系。故于此制之改善，欧美各国，常注意不怠。日本今日仅于中国及暹罗享有外国裁判权，而在暹罗则非中国可比，则谓日本之外国裁判制度，以中国为施行之唯一场所可也。然于此所行之日本制度，恐为各国制度中之最劣者，而日人对之漠